資本主義社会と生活世界

中　尾　訓　生

一　問題意識

社会は，基本関係と構成員の生存を支える経済システム（社会的物質代謝）という二本の柱によって構築されている。基本関係は，個々の構成員を社会的に統括しているところのもの，あるいは結びつけているところのものである。彼，彼女にとって基本関係は，所与である。しかし彼，彼女は日常的に基本関係を形成してもいるのである。基本関係が，彼，彼女を社会人たらしめている。基本関係は有意性の体系と類型化の構造を形成していくとともにこれらの内に貫徹していく。彼，彼女は，生活することにおいて必要な一つ一つの事柄を，必要に迫られて学習していくのであるが，一つ一つの事柄が成している体系的意味は，認識してはいない，つまりそれらの再生のメカニズムは，認識することはない。認識しなくても生活することにおいては支障はないのであるが，社会を認識するためには一つ一つの事柄を体系化し，体系的意味を与えているところのもの，すなわち基本関係を認識しなければならない。[①]

基本関係は｛社会を支えている実践，実践の表現体系，実践の解釈,｝という三つの要素から構成されている。基本関係をこのように規定することで私

1）拙稿,「資本主義社会の再生産と人権観念」（上）『山口経済学雑誌』35巻3・4号

達は個々の主体と社会とを結びつけることができるであろう。ここでいう実践とは，社会を支える実践，あるいは結果として社会を支えることになる実践のことである。実践とその実践の解釈は，個々の主体が行っていることであり，実践の表現体とは，実践の産出物，実践の対象的諸条件のことである。

個々の実践の表現体は，社会的実践の表現体系の要素となるのであるが，個々の実践の表現体と社会的実践の表現体の意味内容は，個別の実践と諸個別の実践の相互作用である社会的実践とが異なっているように異なっている。彼，彼女は，自己の実践の表現体をそれぞれの生活に蓄積している知識に基づいて，そして自己の志向するところによって意味を付与している。これに対して社会的実践の表現体は，社会の機制構造から意味を付与されており，したがってそれは構造的に秩序づけられて体系をなしている。

これらの要素は，個々の主体において不可分離である。なぜなら，実践は，その実践の対象と対象に働きかける手段，すなわち実践の対象的諸条件を切り離して考えられないからである。

実践し，解釈する，あるいは解釈し，実践するということは人間の本源的規定である。

解釈されるのは，実践であり，実践の産出物，実践の対象的諸条件そしてこれらを要素とした表現体系である。解釈することによって実践は，対象化され，彼，彼女にとって実践は，確固たるものとなっていく。解釈行為を奥底で規定しているものは「生活世界」における自己の時間，位置であり，これらは逆に解釈によって画定，あるいは再確認される。

実践，表現体系，解釈のこれら三者は，不可分であり，また相互連関的に発展している。個々の主体の実践の対象的諸条件を表現体系と呼ぶのは，彼らの実践が結果として社会を支えている実践であるかぎり，それは，その社会の性格を表現しているであろうからである。つまり，それは社会の存続の機制を体系的に表現しているのである。

本稿が対象としている社会は資本主義社会である。だから資本主義社会の基本関係は，価値実践の相互作用とこれの表現体系，そして価値実践の解釈

の三つの要素によって構成されている。

個々の主体のそれぞれに多様な実践から資本主義社会を支えている実践を摘出，規定する方法については私はマルクスの方法に依っている。[2]

社会をその社会を支えている実践の相互作用とするなら，表現体系はこの相互作用によって産み出されているということである。

したがって，個々の主体の実践は多様であり，さまざまであろうが，社会を支えることになっている実践によって結ばれている関係を基本関係ということができるであろう。

基本関係は個々の主体によって形成されているのであるが，逆にまた主体を規定してもいるのである。主体は対象（自然的，物理的環境と社会的環境＝実践の表現体系）を同化するという能動的側面と対象に適応するという受動的側面を兼ね備えている。私はマルクスの労働の二重性（具体的労働，抽象的労働）をまず，この意味で理解している。

基本関係は主体にとってはとりあえず「所与」である。換言すると主体は一定の基本関係の下で社会的に教育され，学習をしていくのである。

主体が基本関係によって規制されているということは，主体の実践対象の把握の仕方に，したがって実践を正当化するための解釈の内にみることができるであろう。というのは，彼，彼女の社会についての諸解釈は一定の共通項で整理することができる。それは，当の社会（基本関係）を対象化し，社会の根拠づけ，を問うところの解釈と当の社会は所与として，その社会の機制，機能を扱う解釈のどちらかに分類される。前者の解釈は主体自身を対象としているのであるが，後者の解釈では主体は機能の担い手として多様な性格は捨象され一面的に措定されている。

これが示していることは，彼，彼女の実践の志向するところに従った対象（社会）把握の相違である。私達は当の社会を支えている実践か，それともそれに批判的，あるいはそれを否定する実践か，どちらかに（少なくとも私

2）拙稿，「商品に表示された労働の二重性」『山口経済学雑誌』27巻１・２号

達の志向が一貫しているなら,）ウェイトを置いて解釈している。いうまでもなく，当の社会を所与とするというのは，基本関係を支えている実践（主体）を前提にしているということである。この実践は，社会に適応する実践のことである。これに対して社会を自己のイメージに同化しようとする実践も存在している。これら二つの実践は，主体の内で拮抗している。私は，これをマルクスにならって実践の二重性と呼んでいる。[3]

実践の志向するところの相異は，同じ対象に働きかけているとしても認識対象が相異してくる。これは，説明されるべき主語の相異となるであろう。そしてこれは，実践の過程で積まれた経験の相異を反映している。

もちろん，同じことは述語の部分についても，つまり説明の仕方にもあてはまるのである。社会についての彼，彼女の解釈が，一定の共通項で整理されるというのは，これである。実践の志向するところの相異によって実践者のなす解釈は，主語，及び述語の相異の組合せで分類できるのである。この組合せによって解釈の形式もまた異なってくるのである。[4]これらの点については，「二の2,」で述べるであろう。諸解釈の検討を通して諸解釈を整理・分類できる枠組が摘出されるということのうちに主体が基本関係によって規制されているということをみることができる。そして，実践と解釈の不可分性に注意を促しておきたい。

社会の構成員は，相互に多様な形態で交流しているし，交流可能であり，相互に了解可能でもある。これらのうちで資本主義社会を特徴づける交流（コミュニケィション）は，その基本関係によって規定されている。このコミュニケィションを理解する鍵は貨幣である。貨幣は，この社会を支えている実践を表現しているものである。

私は，これからこの実践の相互交流について論じていくつもりであるが，

3）拙稿,「資本論における実践，批判，論理の諸相」『山口経済学雑誌』34巻1・2号

4）拙稿」「経済カテゴリーの形成（発生）と経済解釈」『山口経済学雑誌』37巻5・6号

そのために次のことを注意しておきたい。それはこの実践の相互交流も含めて多様な交流を可能にしているものについてである。もちろん，彼らは「可能にしているもの」が，何であるのかを知らなくても交流することはできる。所与としての社会で育てられ，成長していく過程で彼らは，「可能にしているもの」を身につけていくのである。

ただし，当然のことながら「可能にしているもの」は，基本関係の内に入り込んでおり，これが，それぞれの資本主義社会の色合いの相違を生じさせているのである。すなわち，「貨幣」を媒介とした関係は資本主義社会を貫徹しているのであるが，これの具体化は「可能にしているもの」によっている。

「可能にしているもの」とは「生活世界」に蓄積され，沈澱している広い意味における知識のことである。ここでは「生活世界」の形成されてきている歴史的時間，経路と資本主義社会の形成の歴史的時間，経路の違いに注意しておかなければならない。(「可能にしているもの」と基本関係，及び基本関係の形成との関連については，三，で述べる。)

彼，彼女は実践し，解釈する。解釈し，実践する。基本関係は，この反復の過程で形成されているのである。

さて，実践（その表現体）を解釈するということと社会的実践の表現体系を読み取ることの相違について述べておかねばならない。前者は，個別の（彼，彼女の）視角から，つまりそれぞれに蓄積された知識，価値観に影響されて行われている。後者は，社会的視角に立脚しなければ読み取ることはできない。A・スミスの表現を借用するとセルフ・ラブの視角からの解釈は，「神」の手によって構成されている表現体系の把握に達しえないということである。表現体系の存在は，社会の再生産の進展上において制度の改革や制度間の調整を余儀なくされるということのうちに現れる。(二の3で述べる)。

彼，彼女の実践の表現体は，社会的実践の表現体系に位置づけられることによって十全なる意味を与えられる。解釈者は，彼，彼女の実践の表現体を構成して社会を解釈するのであるが，この解釈と表現体系が，意味するとこ

ろは相違している。彼，彼女の「生活世界」からの解釈は，表現体系の一面，一部分しかとらえることができないからである。

この解釈と表現体系の意味するところの相違，ズレは，資本主義社会の基本関係には常態的に含まれているであろう。基本関係の動態は，ズレの拡大・縮小として考察されるであろう。ズレの拡大は，社会の不安定度が潜在的に増していることを示している。

ここでいう社会の不安定は，主体の態度，行為を通して把握されるのであって主体を所与とした経済システム作動の不安定性ではない。

社会秩序の維持を第一義の任務とする国家の仕事は，ズレの拡大を隠蔽すること，防止することである。マンデヴィルの「蜜蜂物語」は，ズレの拡大を鮮やかに，明解に示したがために発禁処分を受けたのである。[5]

経済システム（社会的物質代謝）を考察するとき，人は通常，主体を他の生産要素と同じようにものとして惜定している。「経済学」が所与としている合理的経済人がこれである。合理的経済人という主体の形成については「経済学」は，問うことはない。むしろ，問わないことが「経済学」を科学たらしめるもと考えられている。

私の考察対象は，資本主義社会である。したがって資本主義社会を統合している基本関係と経済システムの連関をみなければならない。システムの作動は社会の統合を前提にしている。経済システムの考察において主体を所与

5）「人間を社会的な動物にしてくれるものは，（人々が主張しているような）交際心とか，善良さとか，哀れみとか，温和さとか，そのほかのうるわしい外面をもつ美点にあるのではなくて，（人々の日常的諸行為から判断されるように）人間のいちばん下劣で忌まわしい性質こそ，彼をこのうえなく大きな社会に，そして世の中の通念に従えば，このうえなく幸福で繁栄する社会に，適合させるのにもっとも必要な資質である，」マンデヴィルは現行の秩序は「神の教え」から形成される人間の性格によって保持されているのではなく，むしろ「神の教え」からはむしろ程遠い行為によって均衡していると主張する。｛括弧は引用者｝『蜂の寓話』マンデヴィル，（訳・泉谷，3頁）『The Fable of the Bees, or Private Vices, Publick Benefits』 Bernard Mandeville,

とすることができるのは，この前提によっている。つまりこの前提の下で主体は他の生産要素と代替可能なものとして客体的に考察できるのである。しかし，社会統合の考察においては労働力は他の生産要素と区別しなければならない。他の生産要素は，それが機能しているとき，その所有者とは分離されている。パンは，食べられることに抵抗しないが，労働は，その所有者と不可分離であるので労働が苦痛であれば（苦痛の程度は主観的であって主体の経験による。）所有者は労働そのものに抵抗するかもしれない。したがって社会統合は不安定になるであろう。労働主体は経済システムの遂行者であると同時に社会統合を担っているのである。

この区別を無視すると社会統合は考察対象から消失してしまう。これは社会の把握を失敗させるであろう。

マルクスの方法では抽象的労働（価値実践）という側面から経済システムの考察がなされている。具体的労働（使用価値実践）の側面によって経済システムが意義づけられている。つまり，具体的労働はそれが働きかける対象の具体的属性を認識，評価するのであるから，それは経済システムの総体的評価に至るのである。注意すべきは，これら労働（実践）の二面は主体に内在しているということである。

前述したところの解釈と表現体系のズレということも主体に内在化している実践の二重性からの帰結である。

価値実践は経済システムに適応する側面であり，他方，経済システムを積極的に主体に取り込む，つまり同化する側面を使用価値実践が示す。同化するというのは，システムを積極的に意義づける，根拠づけることによって行われる。

経済システムの作動にはシステムに適応している主体（価値実践）が存在しておれば，システムの「意義づけ」，「評価」それ自体は必要ではない。しかし，「意義づけ」は主体に内在している重要な性向である。このような性向を備えた主体によって社会は構成されているのであるから，当然のことながら社会を把握するためには主体のこのような性向は分析の対象とならざる

をえない。「経済システム」を意義づけるというのは，いうまでもなく価値実践を意義づけるということであり，これは，解釈をすることによって自らの世界に実践を位置づけることである。すなわち，解釈し，実践する，そして実践し解釈するということである。労働（実践）はそれを根拠づけるところの解釈と不可分離である。

主体を所与とする方法は，したがって経済システムと基本関係という二本の柱から構築されている社会を分析するためには不十分である。基本関係の形成にアプローチする行為（実践）論とシステム論を結合した方法でなければならないであろう。本稿は，経済学が捨象した基本関係の形成に，つまり「実践」に重点を置いて展開している。[6]

主体の実践は極めて多様であるが，上述のところから推察されるように論じる実践は資本主義社会を支えている実践である。この実践を根拠（意義）づけるためになされる「解釈」において重要なカテゴリーが，「生活世界」である。

6）システム統合と社会的統合の関連から社会を考察する方法は基本関係と経済システムの関連から社会を考察する方法と類似している。「システム統合とは特化したシステム機能相互の統合を意味している。これは，労働者のシステム機能への社会的統合を前提にしている。」問題はこの内的関連にいかにアプローチするかである。

「システム統合は交換と労働の客体としての労働力概念を前提とし，それに対して社会的統合は交換と労働の主体としての労働力概念を前提とする。」と述べられているようにシステム統合は，システムに適応している主体を所与としている。「社会的統合は間主観性や行動の規範的構造を展開する社会的過程」を扱うのである。

『経済危機とアメリカ社会』J・オコンナー，訳・佐々木，青木，163頁
（『Accumulation Crisis』 James O' Connor）

二，　実践，実践の解釈，実践の表現体系

1　実践について

彼，彼女の実践は，それぞれに多様であるが，多様な内にも共通している実践が存在している。それは，(1)，高く売れる労働力を養成するための実践，（これは労働力を再生するための実践と不可分離である。）(2)，労働力商品としての実践（労働），(3)，商品交換の実践（売り，買いの実践）である。これらの実践は，日常繰返しおこなわれており，彼，彼女が，生活をしていくために必須の実践である。したがってこれらの実践は，彼，彼女の生活形態を規定する。この実践が，価値実践であり，資本主義社会を支えている実践である。価値実践の目的は，価値の増殖である。したがって，価値実践の対象的諸条件は価値化（量化）される。これは，対象を価値的に評価するということであるから，実践者自身も価値化されていなければならない。

(1)，(2)，(3)，の価値実践をそれらが，行われている場から整理しておこう。

資本主義社会では，財の変態（社会的物質代謝）は価値の循環として遂行されている。

(Ⅰ)——G—W$<^{P_m}_{A}$……W′—G′・G—W$<^{P_m}_{A}$……W′—G′・G—

(Ⅱ)　{生活領域} A—G—W {生活領域} A—G—W {生活領域} A———

記号は，A（労働力），G（貨幣），W（商品・生産財，消費財），P_m（生産手段），…P…（生産過程）を示す。(Ⅰ)，(Ⅱ)の継続的変態は，資本主義社会の存続にとって不可欠である。この変態を遂行せしめているのが，価値実践である。(1)は，生活領域で為される。(2)は，(Ⅰ)の生産過程で為される。(3)は，(Ⅰ)，(Ⅱ)の流通過程で為される。

(1)，(2)，(3)のうち(Ⅰ)で為される実践を直接的価値実践，(Ⅱ)でのそれを間接的価値実践と呼ぶことにしよう。価値実践，価値実践の対象的諸条件，価値実践の産出物，これらを貫いて三者を結びつけているものは効率という基準である。それは，量的に測定される。

価値実践者の世界は，量の世界である。ここでは彼らは，代替的であり，したがって没個性的，抽象的なのである。彼らを表現しているものは貨幣である。貨幣は，彼らの態度，行為を解釈することができる共通の言語である。この世界では貨幣を通じて彼，彼女は，暗黙に相互の了解に達するのである。換言すると言葉によるコミュニケーションの背後に貨幣という尺度を置いて彼，彼女は互いの実践を解釈しているのである。

しかしこのような価値実践の性格は，直接的場合と間接的場合とでは濃淡がある。

(Ⅰ)においては資本家，企業家，労働者という役割が，彼，彼女に与えられている。

それぞれの役割が果たされることによって(Ⅰ)は，完全に作動する。

(Ⅱ)においては父親，母親，子ども，あるいは夫，妻というような役割が，彼，彼女に与えられている。それぞれの役割を結んでいる関係は，価値的ではない。なぜならば，例えば夫と妻の関係は商品所有者の交換関係のようにその立場を入れ替えても成立するというものではないということで説明される。これは親子関係でも同じである。この関係は，いうならば固有名詞をもった者同士の関係である。(もちろん｛生活領域｝で彼，彼女に与えられている役割は，これだけではない。例えばスポーツ・クラブのメンバーとして，あるいは地域自治会の役員としてというように。｛生活領域｝ということで私が重視しているのは価値実践の対極にあり，彼，彼女が精神上，最後的に依拠するであろう関係の場ということである。) それぞれの役割を遂行する実践は，したがって価値実践ではない。換言するとこの関係は，具体的であり，個性的であって代替的ではない。

しかるに彼，彼女を間接的価値実践者というのは，(Ⅰ)における価値的世界，価値関係を彼，彼女は，受容している，あるいは受容しようとしているからである。

彼，彼女は，高く売れる労働力を形成するために，つまり(Ⅰ)に適合する知識，技術を習得するために教育を受けようとする。また商品の消費で自己

の存在を，つまり社会的アイデンティティを実感しようとする。このような実践は(Ⅰ)を補強しているのである。したがってこの実践を間接的価値実践と呼んでいる。(Ⅰ)の拡大は生活領域における間接的価値実践の拡大である。あるいは価値実践の生活領域への浸透であるということができる。換言すると生活領域における具体的，個性的関係が抽象的価値関係によって浸食されていくということである。

浸透は決して順調になされるというものではない。それは父親，母親，子ども，あるいは夫，妻というような役割実践と絶えずあつれきを生じさせる。それは彼，彼女の内に葛藤を生じさせる。この葛藤はマートンのいうところの社会構造上のアンビバランスに近い。(補論を参照のこと)

このような価値実践の性格の継続性について述べておこう。

彼，彼女が，雇用者の規律に服しているのは外的強制力によっているのであるが（自己の労働力を商品化し，雇用されなければ彼，彼女は生きていくことはできない)，しかし，彼，彼女は積極的にこの規律に服してもいるのである。

というのは彼，彼女は，この規律の受容に抵抗を感じないような態度を自らのものとしているのである。資本主義社会に生まれ，育ったものは親から，学校から，周りの環境からこの態度を学習し，身につけていくのである。

基本的には，それは，時間に従う，時間を柱とした単純労働に耐えることのできる規制的生活態度である。この生活態度が，欠けているならば資本主義生産を成立せしめた労働の分割 (division of labour) は一般化しなかったであろう。

ヴェーバーに従うとこの態度は，資本主義のエートスということになる。ヴェーバーは「資本主義の精神を，ほとんど古典的といいうるまで純粋に包含」しているとしてフランクリンの論述を引用している。

「時は貨幣であるということを忘れてはいけない。……信用は貨幣であることを忘れてはいけない。……勤勉と質素を別にすれば，すべての仕事で時間の正確と公平を守ることほど，青年が世の中で成功するため

に必要なものはない。それゆえ，借りた貨幣の支払は約束の時間よりも一刻も遅れないようにしたまえ。……信用に影響を及ぼすなら，どんな些細な行いにも注意しなければいけない。……」このような生活論理についてヴェーバーは次のように説明をしている。

「その顕著な特徴として感ずるものは，信用のできる正直な人という理想であり，わけても，自分の資本を増加させることを自己目的と考えることが各人の義務であるとの思想である。実際この教説の内容をなすものは単純に処世の技術ではなく，独自な倫理であって，これを犯すものは愚鈍であるに止まらず，一種の義務忘却を犯すものとされているのである。」[7]ヴェーバーは，この生活倫理をプロテスタンティズムの宗教倫理に結びつけ，日常的な宗教的実践のなかで形成されてきたものと解している。ヴェーバーによると資本主義社会は誕生に際してかかる宗教倫理から形成されてきた生活態度を必要としているというのである。

しかし，この主張を容認しても，出来上がった資本主義社会の維持・再生をみるとき，職場の規律を積極的に受容する態度が，プロテスタンティズムによって産みだされているとヴェーバーの展開を拡大して利用することはできないであろう。もし，そうであるならば，資本主義社会はそれ自体としては存立することはできないということになる。

そうではなくて資本主義社会それ自身が，自己の再生のために必要なこの（価値実践を継続させる）態度を身につけた彼，彼女を作りだしているのである。経済とは異質の領域，つまり宗教倫理によって彼，彼女を経済システムに適応するように教育する必要はないのである。

ヴェーバー自身が，この点は承知していることであった。彼は「勝利をとげた資本主義は，機械の基礎の上に立って以来，この支柱（資本主義精神＝禁欲の精神）をもう必要としない。」と述べている。ただし，ヴェーバーは，

7）マックス・ヴェーバー，『プロテイタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚・梶山・訳，（上）39頁，岩波文庫）

何故この支柱を必要としなくても資本主義は，作動していくのか，ということについては何も述べてはいない。そして次のように続けている。出来上がった資本主義社会を支えている人々は，「精神のない専門人」「心情のない享楽人」である。彼らは「かって達せられたことのない人間性の段階にまですでに登りつめた，自惚れる」と。

ヴェーバーの資本主義精神・エートスは，経済的実践である価値実践を対象化することを可能にさせる，つまり宗教倫理という異質の領域から経済的実践を反省させるのである。経済的実践は，宗教倫理の実現である。この実践の内には，この実践の根拠は，存在しない。宗教倫理によってこの実践は，根拠づけられている。

いったん資本主義社会が，出来上がってしまうとヴェーバーのいうエートス形成の核である宗教倫理は，むしろ余計なものであるだろう。すなわち経済的（価値）実践はルーティン化し，実践の対象的諸条件も類型化され，これらを反省的に振り返ることは，彼，彼女にとってまさに時間の無駄なのである。資本主義社会が，封建的，伝統的社会と対抗しているとき，資本主義社会を担っている人々は，このエートスを必要としたであろう。というのは，絶えず自己の実践を正当化し，根拠づけなければならなかったからである。

「精神のない専門人」とは，合理的経済人のことであり，出来上がった資本主義社会の経済が必要としている価値実践者のことである。マルクスは，資本主義社会それ自体が自らの担い手である「精神のない専門人」を再生していくことを明らかにしたのである。

価値実践者の世界とは，「貨幣」が支配する世界である。つまり，手段（貨幣）が自己目的化していく世界のことである。「貨幣」は人々の行為を表現しているのである。

マルクスは，金＝貨幣に表現されている人々の世界についてのイメージをシェークスピアの「アテネのタイモン」から引き出している。[8]マルクスが明

8）カール・マルクス，『経済学・哲学草稿』城塚・田中・訳「貨幣」の稿，岩波文庫

らかにしようとしたのは，資本主義社会では日常的に貨幣が再生しているということである。つまり貨幣は日々，資本に転化することによって「アテネのタイモン」の世界を現出しているというのである。

価値実践は，既述しているように対象を価値化（量化）する実践である。これは，具体的には対象に値段表をつける，対象を貨幣で評価するということである。実践の対象それ自体は，具体的，個性的であってそれぞれに多様な側面を有しているのであるが，それが価値実践者に映ずる差異は，量的差違のみである。換言すると価値実践の表現体の有意性のコードは，単なる量に一元化することができる。したがって価値実践の拡大は，対象の量化に限度がないようにとどまることがない。そして量化への専心は，主体の多様な創造性の枯渇が，つまり主体の内的世界の貧困化が照応しているということができる。空間的にいうなら，彼，彼女は，価値実践の場では無個性的，匿名的関係によって，すなわち量的関係によって結ばれている。この関係によって価値実践の場では容易にコミュニイケーションが成立する。これはまた価値実践の場の拡大を容易にしていく。彼，彼女は，価値実践から遠ざかるにつれて個性的になる。すなわち，対象に対する実践は多様となっている。多様な形態をとる実践を使用価値実践と呼んでいる。使用価値実践の表現体の有意性のコードは，実践の多様性に応じて一元的ではない。価値実践の強度が弱まっていくということは使用価値実践が強くなっていくということである。

労働力商品として労働している場（職場）は価値実践の場であり，宗教的実践の場，あるいは家庭……は使用価値実践の場ということができるであろう。

さて，次のことには注意すべきである。

この社会では私達は価値実践にも使用価値実践にも徹底化してしまうということはない。

それは私達の生活の場が職場だけではないからである。しかし，これは主たる理由ではない。私が価値実践と使用価値実践の二面を私達は内的に拮抗

させているというとき，それは人間の本源性からの帰結であると考えている。

本来的に人間を規定する労働（使用価値実践）は，社会を規定する価値実践に一元化してしまうということはない。

マルクスは，蜂蜜の巣づくりと大工の労働を比較して人間労働の本源性について語っている。大工の労働は，その結果が蜂蜜のそれに比して貧弱なものであろうとも蜂蜜の巣づくり（労働）とは異なり，頭脳に労働のプログラムを表象し，蜂蜜とは相違して，その結果を予測することができるというのである。[9]

人間労働は，このように労働の意識性によって労働の対象的諸条件に固定された，閉鎖されたものではなく，そしてまた一回限りのものではない。人間は為された労働を消化し，目的の達成度からそれを再構成して労働，及びその対象的諸条件を発展させていくのである。これは，動物と区別された「類的存在」としての人間の特性である。「動物は，たんに直接的な肉体的欲求に支配されて生産するだけであるが，他方，人間そのものは肉体的欲求から自由に生産し，しかも肉体的欲求からの自由のなかではじめて真に生産する。すなわち，動物はただ自分自身を生産するだけであるが，他方，人間は全自然を再生産する。動物の生産物は直接その物質的身体に属するが，他方，人間は自分の生産物にたいし自由に立ち向かう。」[10]資本主義経済は「類的存在」としての実践を剰余価値を搾取するために徹底的に抑圧してしまうとマルクスはいうのである。

作業労働のプログラム，精密化そして生産物の完成度を高めることへの創造的発展ということに，つまり主体と外的自然との関係のうちにだけ人間労働の本源性は，発揮されるというのではない。人間労働の対象には社会もまた含まれる。すなわち労働の創造性は，物理的，自然的対象だけでなく，社会環境に対しても開かれていると考えるべきであろう。

9）カール・マルクス，『資本論』１巻（向坂・訳，「５章１節労働過程」，岩波）
10）同上，『経済学・哲学草稿』96頁

物理的，自然的対象の発展，社会そのものの発展が，主体の行為（実践）から考察されるであろう。

類的存在としての労働によって人間は，精神的存在感を獲得するのである。つまり，労働によって人間は，人間になるのである。私は，かかる意味での労働を使用価値実践（マルクスの表現を借りると類的存在としての人間労働）と呼んでいる。マルクスの「疎外された労働」（価値実践）カテゴリーは，使用価値実践と表裏の関係にあるのである。しかも主体においてこれらは，内的に拮抗している。価値実践が使用価値実践を換起し，使用価値実践は容易に価値実践に変質する。これら実践は弁証法的に主体内において拮抗している。

使用価値実践は，自己の存在意義を獲得するところの労働である。だから使用価値実践は，根拠づけ，意味づけを求めるということになる。その意味づけ，根拠づけが，社会的に受容されるとき，彼，彼女は自己の存在意義を獲得するであろう。

資本主義社会が抱えている最も深刻な問題は，この社会は価値実践によって支えられているのであるから，彼，彼女の実践を価値実践に仕向けるのであるが，彼，彼女は，価値実践では精神的存在感を得ることができないということである。

資本主義経済の拡大は，彼，彼女の価値実践を拡大・深化せしめている。このことは，彼，彼女を内的（精神的）に分裂させる傾向を強めるということになる。換言すると彼，彼女の内部において価値実践と使用価値実践の拮抗が，高まるということである。

それでは強まっていく内的分裂傾向に彼，彼女は，どのように対処しているのであろうか。

2　実践の解釈

「実践の解釈」とは実践の跡づけ，つまり為された実践の観念的構成である。実践の跡づけは，実践の表現体となる実践の産出物，実践の対象的諸条

件を社会的に意義づけることである。それは，実践の目的，動機，そして実践の意義の観念的構成でもある。それは，実践に基づいた主観的世界の構築である。

「解釈」が，意図して他者に提示されるのは，自己の実践（存在）を肯定的に認めさせるためである。つまり「解釈」は，実践の正当化である。「解釈」は，満足のいく形での社会的アイデンティティの獲得を意図している。これに成功することで彼，彼女の主観的世界は，客観的世界としてのかたちを得る。つまり，彼，彼女は，精神的存在を実感することができる。かくして実践と解釈は相互連関的に作用して確固たるものとなっていく。「相互連関的に作用」しているということについては注意を要する。すなわち「解釈された実践」と実践それ自体との相違である。前者は主観的であり，後者は客観的である。「解釈された実践」が社会的に容認されたとしても，したがって一定の持続性を獲得したとしてもこれは実践それ自体ではない。資本主義の存立は価値実践によっている。資本主義社会は価値実践と「解釈された実践」との乖離を前提にしている。もしダニエル・ベルのように文化を「アイデンティティーを常に保持しようとする過程」であるとし，「美的な世界についての一貫した視点と，自己についての道徳的な認識と，生活スタイルとに執着することで獲得される」というように定義するならば，資本主義文化は「この乖離」のうちに存在するであろう。したがって私はダニエル・ベルが「文化の分野では，このようなブルジョア的価値観は完全に拒否されている。」[11]ということに反対である。というのは価値実践を促進させるために資本主義社会は反体制的文化でさえも内在的に許容する，あるいは選択することができるからである。「乖離」ということからの文化の展開については別の機会に譲ることにしてここでは資本主義文化システムの弾力性に注意を換起することにとどめて本題に戻ることにしよう。

11)『資本主義の文化的矛盾（上)』ダニエル・ベル（林雄二郎・訳・講談社文庫）『The Cultural Contradictions of Capitalism』by Daniel Bell

「解釈」を他者（＝社会）に受容させるため，納得させるためには「解釈」は，どのような性格をもたなければならないであろうか。これは，彼らが，とり結んでいる関係によって規定されるであろう。「解釈」される実践は，価値実践であること，結ばれている関係は，価値実践による関係（資本主義社会の基本関係）であること，これらは，前述のとうりである。この関係を彼，彼女は，市民関係として意識している。

(1)　市民関係を律する原理は，つまり市民が，日常的に了解している常識は all or nothing,と give and take,という市場の原理である。日常的に幾回となく行われている商品交換は，殆どの人々にみられる実践である。この実践は，(1)の原理の下で行われているし，またこの原理は，実践によって実在化されている。

(2)　市場の理念的構成では彼，彼女は売り手であり，買い手であるのだから，代替可能，つまり立場を交換しても不都合は，生じない。彼，彼女がもっている自由・平等の観念は，これから生じている。自由・平等の規範は，彼，彼女の実践の内に実在化している。

彼，彼女によって意識されているこれらの事柄は，つまり(1)，(2)は，「解釈」の性格を規定するであろう。なぜなら，他者に納得してもらうには，(1)に反する内容であってはならないであろう。そして彼，彼女が，「解釈」を受け入れざるを得なくなるというのは，それが，論理的であるからである。これは，(2)から引き出される。彼，彼女は，自由で平等であるから，相手に対して何らの権威を持っていない。したがって，他者が納得した解釈は，ひるがえって自分自身も規制することになる。これが，彼，彼女の関係を律するものとして論理を生じさせてくれる。

このような「解釈」の性格は，「解釈」についてのコミュニケィションが，深まっていけばいくほど彼，彼女を律するものとして現われてくるであろう。そのとき，(1)，(2)は，市民生活を根拠づけている人権の諸規範として体系化されているものと結合するであろう。つまり，解釈の中味は，人権の諸用語によって表現されるようになる。[12]

実践を解釈する，ということについてもう少し述べておこう。

経済システムの規則性は，価値実践を日常的にルーティン化された実践とする。これは，彼，彼女が，実践，及び実践対象を類型化しているということ，有意性を共通にしているということである。

ルーティン化された実践の相互コミュニケィションは彼，彼女にとって馴染みのものであり，ここでは他者を了解すること，他者の実践を予測することは容易である。逆に言うと，このコミュニケィション（社会）においては自分自身の位置も役割も確定されているということであり，したがって社会的アイデンティティを求めて自己反省，自己主張をするというようなことはない。すなわち，ルーティン化された実践の日常性において彼，彼女は，自己の精神的存在に不安を覚えたり，またこれを疑問視することはない。たとえ不安を覚えたとしても彼，彼女は，これに対処する方法を知っているであろうし，社会も構造的に彼，彼女の不安を打ち消すような装置を有していくようになる。社会は，結果として「精神なき専門人」を創出していくのである。

私が，問題にしていくのは潜在化している精神的緊張，つまり内的分裂傾向に「対処する方法」についてである。日常的なルーティン化された状況下では実践を意義づける，あるいは反省する「解釈」の論議（コミュニケィション）は，彼，彼女には仲々生じないのである。

彼，彼女が，「解釈」を提示するというのは，そのようにせざるを得ないような精神的に不安定な状況に置かれたということである。換言すると，反省的に自己のルーティン化された実践を凝視せざるを得ない状況に存るということである。従来からの安定した精神的状況の連続性が切断されたのである。

見馴れた風景が，従来とは異なって映じるほど彼，彼女は，自己の有意性

12）拙稿，「資本主義社会の再生産と人権概念」（中）（下）『山口経済学雑誌』35巻5・6号，36巻3・4号，

の体系を動揺させてくる。彼，彼女は，改めて自己の世界における位置を，したがって社会における自己の存在意義を画定する必要に迫られてきているのである。それではかかる状況に彼，彼女は，どうして置かれるようになったのであろうか。

それは，彼，彼女の個別的事由による場合と社会的事由による場合の二つが，考えられるであろう。例えば，病気で，あるいは事故で身体的，精神的障害を受けたというような場合，それを個別的事由とするのは，病気の，あるいは事故の直接的原因が，一次的には彼，彼女の個別的状況，あるいは不注意にあると判断されるからである。このような個別的事由である場合，「身の不運」として事態をあきらめることになる。

私が，問題としているのは社会的事由による場合である。もちろん個別的状況と社会的状況とを明確に分離することはできないのだから個別的事由と社会的事由とを無関係とするわけにはいかない。ここでの区別は便宜的なものである。

社会的事由というのは，価値増殖を動機とする個々の価値実践，及びその相互作用から生じる諸々の問題が，彼，彼女の生活に深刻な影響を与える場合である。例えば，(a)，不景気で失業したというような場合，あるいは(b)，企業活動による大気の汚染で病気になったというような場合である。あるいは，(c)，絶えざるより多くの貨幣を求める競争に明け暮れる生活から精神的緊張，あるいは疲労していくというような場合である。精神的緊張，精神的疲労が生じる所以はさまざまであろうが，例えば，「お金をもうける」という目標，あるいは会社における地位の上昇という目標が達せられない場合，あるいは，これらの目標が達成されたとしても，これらの目標が「生きがい」の指標になり得ないというような場合，である。

これら(a)，(b)，(c)，の影響は，潜在的可能性としては彼だけに，あるいは彼女だけにというのではなく，すべての人々に及ぶのである。しかし，具体的には時間的，空間的に限定されて彼，彼女にだけ現われるのである。(a)，(b)は，個々の価値実践の相互作用が，彼，彼女の生活に影響を与える場合で

ある。(c)は，価値実践それ自体が，彼，彼女に影響する場合である。(a)，(b)は，彼，彼女にとって外的問題であり，それは顕在化しているのに対し，(c)は，彼，彼女にとって内的（精神的）問題であり，潜在的である。彼，彼女の個別の状況が潜在的であるものを顕在化させるのである。

したがってそれらに対処する仕方は(a)(b)と(c)では異なるであろう。

(a)，(b)は，価値実践の相互作用（経済システム）が産み出し，価値実践の相互作用が，問題を処理していく。彼，彼女は，この処理を評価して自己の実践を積極的，あるいは消極的に「解釈」をするのである。つまり，「解釈」は，究極的には基本関係の維持に至るか，それともそれの否定を志向するものとなるか，のどちらかである。もし，経済システムが，失業者を創出し，彼らを雇用することができないのであれば，つまり彼らに困窮の生活を強いるのであれば「解釈」は，所与の基本関係の意義を問うものとなりやすく，基本関係を否定することとなるであろう。経済システムが生み出した失業や環境破壊の問題がシステムを改良することで解決できるということになると「解釈」は基本関係の維持に帰結する。もちろん基本関係の維持となる対処の仕方として(a)(b)の事態を個人的事由，つまり個人の「運」のなさ，「能力」のなさに解消してしまう仕方も存在している。

(c)について，まず最初の場合，彼，彼女は目標そのものの（文化的）価値は受け入れているのである。目標が達成されないのは時流に遅れた「運」のなさ，あるいは自己の能力のなさ，として精神の緊張を解消し，疲労を慰撫する。

次に，目標への努力が挫折する，あるいは目標が達成されたとしても「生きがい」とならない場合，対処する仕方は「お金もうけ」に背を向けることであり，別の目標に向かうことで精神的疲労の回復をはかる。これは価値実践を使用価値実践に転換していくことである。(c)について論じるのは最初の場合に生じる「解釈」である。

(a)(b)(c)の事態を個別的事由に解消するのは本人にとって消極的な「対処の仕方」であるが，この対処の仕方は資本主義社会の原理から導出されるもの

である。自由競争，競争条件の平等という観念は，競争に勝つも負けるも彼，彼女の「運」しだいというわけである。

いずれにしても価値実践そのものにおいて，つまり日常の生活において彼，彼女が，自己の存在意識を獲得することができるかどうか，つまり「生きがい」，精神的充足感を得ることができるかどうか，ということが問題なのである。価値実践のコミュニケィションは，経済システムの拡大とともにその密度は強められるであろう。しかし，このコミュニケィションの下では自己の存在意義を表現するものを見出すことはできないがために密度の強化は，精神的緊張を高めるだけとなる。彼，彼女は何らかのきっかけで容易に精神的不安定に陥る状況に置かれている。

(c)について目標が達成されるか，否かということを基準に論じたが，目標が「お金もうけ」である以上，この目標は決して達成されない。なぜなら100万円の目標は200万円になり，300万円，……となり，限りはないからである。

彼，彼女の行う「解釈」は，「解釈」によって主体の創造性の枯渇，多様性の貧困化を麻痺させようとする主体の一種の自衛反応である。つまり「解釈」は，この精神的緊張，疲労への対処でもあるのである。上述しているように基本関係の正当化に帰結する「解釈」に共通している性格は事態を個別的事由に解消することである。「解釈」は，実践の産出物，実践の対象的諸条件を解釈世界の内に自己の存在意義を表現するものとして取り込むのである。

(a)，(b)の場合，(c)の場合，「解釈」の構造は，相違している。

前者の「解釈」は現実の価値実践を対象としているのに対し，後者の「解釈」は現実の価値実践の世界と解釈世界を切断するところに特徴が存在している。「切断」こそが彼，彼女の自衛反応である。「解釈」によって日常の現実世界から解釈世界へ逃避するのである。ただし，いずれの「解釈」にしても，彼，彼女は，再構築した（主観的）世界において自己の位置を画定しようとするのである。

そして「解釈」が受容されることで彼，彼女は，精神的充足感を獲得するのである。

「解釈」の受容される仕方も前者の「解釈」と後者の「解釈」では相違している。

前者の場合，「解釈」の対象が，実践の表現体，実践の相互作用の表現体系という客体であることから諸解釈の相互コミュニケィションは，議論であり，論理の追求という形態をとることになる。後者の場合，個々に解釈世界を形成し，解釈世界の確立には観客としての他者を必要とするのであるが，観客との相互コミュニケィションは存在しない。

しかし，ここで問うべきことは，ほとんどの人々が，価値実践の否定に至るような影響を潜在的に被っている状況にありながら，それでもなお価値実践の否定には至らない，ということである。資本主義社会は，主体に大いなる負担をかけて，つまり精神的緊張をかけることで再生産を続けているのである。基本関係を構成している一つの要素である「(価値実践の) 解釈」の果たしている役割は，この緊張の緩和にある。

すなわち「解釈」において彼，彼女は，自己の価値実践を使用価値実践とみなしているのである。価値実践のコミュニケィションを彼，彼女は，観念的に具体的，個性的世界に解釈してしまう。価値実践のコミュニケィションで蓄積された精神的緊張（c，の場合）を主観的に構築した解釈世界で彼，彼女は，ときほぐすのである。

これによって，彼，彼女は一時的に精神的安定を回復するのである。

ここで自分自身を根拠づけることができるのである。解釈世界は，現実の価値実践の世界を浮遊する。現実世界と解釈世界の二極分解であり，資本主義社会は，例えばこの二極分解を広告によって固定せしめるのである。[13]解釈世界は，販売戦略に位置づけられて間主観的 (Intersubjectivity) 世界として更に補強されていくのである。

---

13) 拙稿，「販売広告と社会統合」『山口経済学雑誌』37巻1・2号

ルーティン化された実践，すなわち価値実践の相互コミュニケィションは，このようにして解釈によって維持される。

資本主義社会においては無個性的，匿名的な関係，いわゆる貨幣関係に依って彼，彼女は結ばれており，したがって精神的存在感の不安定性を増している。というのは，かかる関係の下では彼，彼女は代替可能であり，存在の根をもつことができない。

根をもつということ，つまり世界における空間的，時間的位置の確定は具体的，個性的なるものによって可能となる。しかるに彼の実践の対象的諸条件も，彼女の実践の対象的諸条件も共に価値（貨幣）化されており，彼の，あるいは彼女の個性を表現するものは価値量の多寡だけである。

実はここに資本主義社会では彼，彼女にとって私的世界，すなわち「生活世界」（後述する。）の重要性が存在している。これが，解釈世界の成立を助けることになる。

例えていうならば，資本主義社会という大海に存在する島としての家庭の重要性である。ここでは彼，彼女は，代替不可能であり，個性的，具体的存在として認識しあっている。

したがって解釈に提供される意味，イメージは，主として家庭からのものであろう。

家庭で具体的に感得されている生活の対象的諸条件に価値実践の対象的諸条件を同化するのである。

解釈は，以上述べてきたように二本の柱によって枠組を与えられている。

一つにはそれは，資本主義社会の秩序原理に反しない。つまり社会的規範を採用しているということである。資本主義社会の規範は人権の諸規範である。これが解釈枠組みとなっているのであるが，解釈枠組は商品交換の演繹体系に包摂されなければならない。二つには家庭で蓄積されてきている知識によって色づけされていること。（後述する。）そして解釈は二つの性格のどちらかによって規定される。一つは実践を正当化するために論理的であろうとすること，したがって他者の解釈との相互コミュニケーションが成立する

ことである。二つには他者とのコミュニケーションは一方通行的であるということである。前者は社会に対して開かれているのに対して後の解釈は解釈者の内部に沈澱していく。

3　価値実践の表現体と価値実践の相互作用の表現体系

ここでは基本関係の構成要素としての表現体系が論じられている。表現体系は，基本関係を構成している他の二つの要素，価値実践，解釈と連関して基本関係を強固にしたり，不安定にしたりしている。表現体系は価値実践の，及び解釈の対象であって社会環境を構成しているということができる。個々の価値実践は表現体系によって規制されている。つまり実践の方向，仕方は表現体系が大枠を与えている。そして個々の価値実践の相互作用が表現体系を形成している。基本関係は，これら三つの要素のバランスの上に成立している。これら三要素は主体の実践において生みだされ，弁証法的に関連している。

表現体系の他の二つの要素との連関は，どのようになっているのであろうか。

表現体は，実践の産出物であり，その対象的諸条件である。これらは，何等かの具体的なモノとして知覚される。経済システムにおいては同じ使用価値を有するモノとしてのこれら表現体が彼の手元にあるときは，つまり彼の（価値増殖の方法）視点からすると商品であるが，彼女の手元にあるときは，つまり彼女の（価値増殖の方法）視点からすると資本とみなされたりする。あるいは彼の手元にある貨幣は購買手段であるが，彼女の手元では資本であったりする。これは彼の対象把握と彼女の対象把握の相違ということに帰結する。この相違は実践の相違ではなく，（彼，彼女の実践は価値実践である）彼，彼女の視点の相違から生じている。これは個々の視点からの社会の把握の困難を示している。

諸表現体は価値実践の相互作用の表現体系に組み込まれており，社会の把握とはこの表現体系を読み取るということなのである。

諸価値実践は，相互に作用し合って意図せざる結果であるが，(Ⅰ)(Ⅱ)を継続的に循環させている（二の1）。この循環は，社会存立の基礎であり，社会が存続しているということから規則性を有し，体系的となっている。彼の視点からの循環，彼女の視点からの循環，これら循環の各環節は，秩序だって相互に絡み合い社会的な循環(Ⅰ)(Ⅱ)を形成する。したがって諸表現体は，社会的循環を表現して体系的に位置づけられるであろう。彼にとっては単なる貨幣が彼女にとっては資本であるというのは彼の循環からの解釈と彼女のそれからの解釈の相違である。これは価値を増殖させる仕方の相違に由来する。

これらは当然のことながら彼，彼女にとっての具体的なモノとして知覚されるのであるが，解釈の対象としては価値実践に照応した価値範式によってまとめられる価値カテゴリーで表現されているものなのである。かかる意味において表現体系は，価値実践の社会環境を成しており，価値実践は，これに適応しなければならない。しかし他方では価値実践は，表現体系を同化していくのである。この適応，同化は，価値実践者によって実践対象である表現体系が一定の有意性の下で知覚，認識されていることを前提とする。換言すると価値実践者達は共通の（価値）世界を有している。だから価値実践は相互に作用し合うことが可能なのである。価値実践者＝解釈者にとって表現体系は，価値カテゴリーとして与えられている。[14]（実践者と解釈者の分業は，ここではまだ考慮されていない。）

つまり実践の産出物，実践の対象的諸条件は，現象学的用語を適用すると前述語的経験として商品であり，また貨幣，資本なのである。もちろん「前述語的経験」は実践と不可分離であるということに注意しておかねばならない。正当化のための解釈は，社会に受容されるには，つまりその目的を達成するには社会の維持に適応している，あるいは貢献している実践（価値実践）に自己の実践が一致しているということを必須の条件としている。この

14）同上，「経済カテゴリーの形成（発生）と経済解釈」

一致の意味するところは，解釈がこの場合価値カテゴリーとしての表現体系の存在を所与としているということである。これが，解釈が社会に受容されるための前提なのである。この場合，解釈が有している二つの性格，すなわち規範と論理は，資本主義社会の規範であり，循環の効率性からの展開ということになる。彼の解釈においても，彼女の解釈においても資本主義社会の規範は共通に受容されている。相違はそれぞれの立場からの効率に関連して生じている。解釈が，社会的に受容されることによって，自己の実践の正当性を認められるのであるが，これによって彼，彼女は，社会的アイデンティティを実感するのである。

目的を達した諸解釈に共通していることは，上述しているように，これらが価値カテゴリーの表現体系を自明視しているということである。すなわち解釈者は価値カテゴリーの表現体系を自然環境と同じように扱っている。彼らは，例えば三位一体の範式，つまり資本と利子，労働と賃金，土地と地代とを結びつけることの奇妙さに全く気がついていない。現状を所与とした解釈は，あれこれ述べていても結局のところ現状の肯定，現状の弁護に帰結する。

そしてまた解釈の対象となった表現体系は，表現体系の全体を取り上げているというのではなく，解釈者の視点が，それぞれの個別の実践によって規定されているところから，表現体系の一部分を切り取っているだけなのである。

解釈された表現体系が，彼，彼女によって，すなわち社会によって受容されるとき，この解釈された表現体系は，意識的に構成されたものとして，すなわち管理可能なものとしてわれわれの眼前に存在する。

実際にはこれは価値実践の相互作用を表現しているのであって意識的に構成されたというものではない。

つまり具体的なモノである表現体が，われわれにとって周知の意味を発して存在している。解釈された表現体系は，解釈と表現体系というこの両者の性格から規範的に，しかも論理的に構成されているのである。解釈は，自己

の実践の正当性の主張ということから規範を含むことになる。そして他者に容認されるためには，解釈は論理的でなければならない。そこで逆にわれわれの眼前に存在する「解釈された表現体系」が，すなわち容認された論理が，われわれを規制してくる。これは解釈上に想定されている実践者の役割の確定でもある。役割の遂行がすなわちルーティン化された実践が，「解釈された表現体系」を実体化していく。私は，社会的に受容されたところの，この「解釈された表現体系」を制度と呼ぶことにする。(表現体系が，制度であるというのではない。)「社会的に受容されたところの解釈された表現体系」は，制度として実体化されるのであるが，われわれは，制度それ自体がもっている秩序に従わなければならなくなる。つまり価値実践は制度に適応しなければならなくなる。価値実践は制度によって回路づけられる。彼，彼女は制度から与えられた役割に従って実践する。「私は自分の立場上，これ以外のことは考えようもない，こうするより仕方がないのだ」と弁明する。いわゆる「役割の物象化」が生じる。

制度は役割を与えられた諸個人の経験のうちにあらわれる。

制度は，回路づけられた実践からの逸脱をチェックするために制裁の機構を備えてくるのであるが，これは制度の維持にとって副次的である。というのは制裁機能が十全に発揮されるのは，われわれの実践が制度によって回路づけられるということを前提にしてのことである。換言すると制裁機構は，制度カテゴリーの発生から理解されるように制度それ自体が有する性格，すなわち社会的に容認された根拠づけ，あるいは規範の下でその機能を十全に発揮するのである。

価値実践が，ルーティン化して(Ⅰ)(Ⅱ)の各環節において価値実践者の役割が，確定してくるとそれに照応して表現体系もまた確定してくるのであるが，この表現体系を制度というのではない。制度は，社会的に受容された解釈の対象，すなわち表現体系の切り取られた各部分である。それは社会的に受容された解釈された表現体系である。制度の範囲，その強固さは解釈の「受容された範囲，程度」によるであろう。

解釈は，正当化を主張する解釈であるから，解釈の対象に対して志向的である。

解釈を通して表現体系は，実践者＝解釈者に「述語的」に経験される。[15]

したがって，制度は，表現体系と解釈に供されるところの蓄積されている「知識」に依存しているということになる。(この点については，三で述べることになる。)

表現体系の複雑さは当然のことながら「知識」の高度化，専門化を生み出してくる。これは実践者と解釈者の分業，知識の独占という事態を生じさせる。

正当化を求める解釈の性格から推察されるように制度は，価値実践の相互作用，つまり社会的な循環(Ⅰ)(Ⅱ)を効率化，安定化せしめるように組み立てられていると主張する。効率は目的合理的に構成され，その追求は社会的資源を浪費しないということであり，無駄を排除し，節約をするというように説明されるが，これを目指しての制度の実践は規範的であり，論理的であるということになるが，これが制度の存在根拠となる。

制度が規範的であり，根拠づけられなければならないというのは，制度が彼，彼女によって正当性を求められるということによってである。

前述しているように各制度は表現体系の各部分に対応しているのであるが，しかし各制度を結合しても全体としての表現体系になるというものではない。

社会的な循環(Ⅰ)(Ⅱ)の価値の効率化，安定化を目指して各制度間の調整が図られる。

例えば，財政制度，貨幣制度，信用制度，……等々というような経済制度は，(Ⅰ)(Ⅱ)の循環の各環節における実践の場から循環を効率的に，しかも安定的に維持せしめるように解釈された表現体系であり，現実化されたも

15) 述語的経験についてはヘルムート・ワーグナーの説明を借用。「事物などの間接的経験。それは，既存の知識の蓄積を利用することによってなされる解釈的判断にもとづいており，直接的に知っている領域の外にある事物などに特定の性格を述定することである。」
(『現象学的社会学』アルフレッド・シュッツ，訳・森川，浜，365頁)

のである。[16]

価値実践の相互作用が，(Ⅰ)(Ⅱ)を循環させているのであるから，表現体系は，循環の仕組を示している。解釈された表現体系は，この仕組を効率的に論理化するものであろう。価値実践はわれわれの生活を支配するところの実践であるから価値実践の交流を可能ならしめている優位性の体系もまた支配的である。換言するとこれらの制度を成立せしめる知識もわれわれに蓄積されている。この知識は日常的に生活していく過程で身につけていくものである。しかし制度を運営する知識には専門的に学習しなければ近づけないようになってくる。ここにおいて実践者と解釈者の分離，分業が一般化してくる。

解釈者は解釈を提示して実践者の用に供する。知識獲得の不均等は分業を固定化し，知識が解釈の場への参入障壁となる。

制度が確立されてしまうと彼，彼女は制度によって実践を回路づけ，類型化していく。

---

16) 社会的に承認されたところの「解釈された表現体系」を制度と規定した。経済制度は価値実践の相互作用の表現体系である循環（Ⅰ）（Ⅱ）を解釈したものであるから，経済制度は再生産する。経済制度の一つである信用制度は価値実践者である資本家が自己の資本の流通時間をできるだけ短縮しようとする実践を正当化するための解釈が社会的に承認されたものである。解釈の対象は諸資本家のこのような実践の相互作用の表現体系である。

表現体系を構成している各要素は商品であり，貨幣，資本である。すなわち諸資本家の実践の表現であるモノ（実践の対象的諸条件）がこれらの要素であるのだが，これらは価値カテゴリーで表現されている。(拙稿「経済カテゴリーの形成と経済解釈」)

財産制度は商品交換の諸価値実践による相互作用の表現体系の社会的に承認された解釈である。この解釈は商品交換を正当づけ，これを効率化する内容となる。それは交換を可能とするために私有財産を正当づけ，等価交換を保証するため交換者の自由・平等を根拠づける，ものである。また自分の欲求を充たすためには他者が欲求しているところのものを提供しなければならない。他者も同じである。自分と他者の平等の観念は商品交換によって絶えず裏打ちされている。貨幣はこの欲求充足の体系を効率化せしめるものとして根拠づけられる。かくして商品交換の発展は財産制度を発展させる。それは財産制度を正当化させる解釈を実在の商品交換の発展に適応させることによってである。財産制度は商品交換によって再生させられて

したがって実践を正当化する個々の解釈は，制度を正当化する解釈となっていく。

あるいは制度を正当化する解釈を自己の解釈として受け入れていく。

制度は表現体系の一部分を精緻化しているだけであるから，各制度を調整，適合させて全体としての表現体系に適応させる，つまり価値実践の相互作用を円滑化させるという課題が生じてくる。この課題に取り組むのは制度の運営者である。

価値実践者と同じように制度運営者もまた自己の実践（制度的実践）の正当性の承認を他者に求める。制度的実践の正当化の「解釈」の中味は制度の根拠づけと制度の効率的運営である。制度は「社会的に容認されたところの解釈された表現体系」であるという前述の規定は，価値実践者の正当化の「解釈」から引き出されたものである。この規定は制度カテゴリーの形成をとらえていることに注意しなければならない。制度的実践の正当化は制度を維持するために求められているのである。制度維持者が正当化の解釈を提示

いるのであるが，商品交換は価値（資本）循環の一環として拡大・発展している。したがって財産制度は信用制度によって吸収されると考えられるのであるが，或る部分は吸収されない。なぜなら財産制度は商品交換によって維持・再生されているのであるが，財産制度は価値的消費のみならず，欲求の充足，つまり商品交換から外れた財の使用価値的消費を保障する。財は価値循環において価値的に消費される。使用価値的消費は循環（Ⅱ）の一環節である生活領域において行われる。使用価値的消費は消費対象としての財に対する専一的支配を前提にしている。

この部分は信用制度によってはガヴァーすることはできない。我妻の「物権に対する債権の優越性」の論理はこのカヴァーできない部分の捨象によって成立している。

財産制度を構成しているものは価値カテゴリーであるとともに使用価値カテゴリーで表現されているのである。だから商品交換を絶えず発展させている資本主義経済は財産制度が保障している財の消費形態の二面の調整を絶えず迫られてくる。資本主義経済は価値的消費を推進するのであって使用価値的消費とは対立しているのである。

消費形態の二面の調整は財産制度の変革をともなってくる。財産制度は人間の欲求に関わっているという点において，（財の使用価値的消費をともなう）したがってそれは人間の類的生活の表現体系の基礎にあるものということができる。財産制度についての展開は後の機会に譲ることにする。

するのである。制度の維持者と価値実践者は一枚岩というわけでもない。

もちろん価値実践者は社会秩序が安定していることを望んでいるのであるが，価値実践は結果として社会を支えることになるというのであって社会の維持を直接の目的にしているのではない。価値実践は未来志向的であり，革新的である。制度を維持する実践は過去との連続性を保持する。制度それ自体は社会的であるのだから，制度を根拠づけ，制度を正当化する主張は規範的にならざるを得ない。しかも規範は匿名的，抽象的価値関係に適応するものでなければならない。

しかしこの適応は自動的に円滑に進行するというものではない。社会的循環(Ⅰ)(Ⅱ)はその効率性を逆に制度によって阻害されるということも生じる。

価値実践は個別的であり，制度的実践は社会的であるということが「阻害」を生じさせる要因であるが，基礎的には次の点を考察しなければならない。すなわち制度的実践は価値実践と使用価値実践の対抗関係に立脚しているということである。

制度を正当化する規範（人権の諸規範）の実体が価値実践によって与えられるか，使用価値実践によるのか，ということである。

三　生活世界

1　資本主義社会再生産における「生活世界」の位置

ここでいう「生活世界」とは彼，彼女が自己の存在意義，「生きがい」を見出す世界のことである。自己の存在を根拠づけるところの世界であるから「生活世界」は，最も上位の世界である。[17]つまり，「生活世界」は彼，彼女の多様な実践に照応した多様な世界を包括的にとりまとめる志向性を提供する。換言するとそれは彼，彼女が経験することに統一的意味を与えるということである。彼，彼女は構成した各世界のうち彼，彼女の時間の大半を占め

る主要なそして欠くことのできない実践に照応した世界を「生活世界」としていてるであろう。換言すると彼，彼女は主要な実践において「生きがい」を求めるであろうし，求めざるを得ないであろう。

「生活世界」は彼，彼女にとって必須の実践から直接的に影響を受けているということである。あるいは次のようにも言うことができるであろう。すなわち資本主義社会の再生産が前提されている以上「生活世界」は必須の実践から（価値実践）から決して逃れることはできない。

「生活世界」は実践を正当化するための「解釈」に志向性を与える。

「生活世界」は彼，彼女が現実の生活で経験し，観察したこと，また彼，彼女が志向していることと相互連関的である。「生活世界」の形成についてその相互連関性をみるとき，相互連関性は第一次社会化と第二次社会化ではその内容は相違している。(この点については後述する。)

「生活世界」は彼，彼女の主観的世界であって彼，彼女にとってのあるべき世界であり，望ましい世界である。

したがってそれは，彼，彼女の現実生活と切り離された世界であるが，しかしいかなる生活世界を描いているかということは，どのような生活をしてきたか，しているか，に規定されているであろう。「生活世界」と現実生活との乖離度の上昇は孤独，不安感の強度を高める。「生活世界」では彼，彼女は代替できない，あるいは彼，彼女は具体的，個性的存在として，欠かすことのできない存在として自己を位置づけているである。そうでなければ「生活世界」で存在意義を実感するということはできないであろう。彼，彼女は「存在意義」あるいは「生きがい」をどのようなときに求め，どのよう

17) 同上，ヘルムート・ワーグナーは「生活世界」を次のように説明している。「生活上の実際的な目標を追求しているときに出会うさまざまな事物，人間，出来事によって画される，個人の経験の全体的領野。それは人間が覚醒している世界であり，人間の生活の至高の現実としてあらわれる。」(365頁) 本稿で私が述べている「生活世界」はワグナーのものとは異なる。「生活世界」は現実の生活とは区別されており，経験に立脚しているが，つまり彼，彼女にとっての欠かすことのできない実践に影響され，主観的に構成されたものである。

なときにそれを実感するのであろうか（二の2）。

彼，彼女にとって「存在意義」あるいは「生きがい」を実感することは現実に生活を続けていくうえで極めて重要なことである。「生きがい」の実感は「生活世界」における自己の位置が社会的に裏打ちされたということ，つまり社会的に確定されたということである。すなわち自己の根拠づけが為されたというわけである。

資本主義社会では自己の根拠ずけは「神」によってではなく社会によって，つまり正当化の解釈を受容した市民によって与えられる。つまり正当化を求める解釈が市民間の感情交流によって成立している共感によって受容されるということである。市民間の感情交流は，それぞれの立場を観念的に交換することによって成立するのである。立場の交換が観念的に可能であるというのは，この社会，つまり商品交換社会の特徴である。「根拠づけ」が「神」によって与えられるとするならば，「生活世界」とは宗教世界ということになる。そうすると宗教世界は「解釈」を通して基本関係の形成に不可欠の役割を果たしていることになり，資本主義社会はその再生産機構に欠かせぬ要素として宗教世界の位置を設定していなければならないことになる。

本稿では宗教世界は「解釈」の志向性を規定する一要素である伝統的価値の一部に含まれるものと考える。資本主義社会において宗教世界を最も上位の世界としている人々が存在していることを否定しないが，資本主義社会は彼らを再生産する機構はもっていない。

感情交流による共感の成立，及びその仕組については，A・スミスの「道徳感情論」に詳しく展開されている。他者を許容する程度から称賛する程度まで解釈を受容する共感の範囲は広い。市場経済は共感の形成に積極的に関与していくのであるが，関与の度合いが強まるにつれて共感の中味は均質化していく。

解釈が受容されることによって解釈者の「生活世界」は現実生活と密着してくる。

現実の生活は価値実践によって支えられているのであるから，彼，彼女は，

価値実践を積極的にか，消極的にか，いずれにしても継続しなければならない。この継続は「生きがい」あるいは「存在意義」の実感によって確保される。

「生活世界」と価値実践（現実生活）が協調的であるならば，社会は安定的であるだろう。もし，両者が対立的であるならば社会的には協調させなければならないであろう。

価値実践の世界と生活世界は対立的である。価値実践の世界は，無差別一様な量の世界である。この世界では彼，彼女は量によって評価され，量によって秩序づけられている。彼，彼女の差違は量の多少だけである。彼，彼女を結んでいる関係は価値（量）関係である。「生活世界」が具体性の世界であるなら，価値世界は抽象の世界である。[18]

「生活世界」が意識的に構成されたところの世界であるのに対して価値世界は無意識的に作り上げられた世界である。すなわち価値世界は自己の実践を反省的に考察しなければ認識することはできない。価値実践によって（結果的であるが）支えられている資本主義社会という全体的視野に自己の実践を位置づけなければ価値世界は認識されない。

価値世界の認識は歴史的文脈において，時間の流れにおいて，いうならばアナログ的でなければ不可能であるのに対して「生活世界」はデジタル的場面の寄せ集めであっても志向性を与えるというその用を果たすことができる。

正当化の解釈が市民によって受容されたことで彼の，彼女の「生活世界」は根拠づけられたわけである。すなわち彼は，価値実践を父親として，あるいは夫としておこなっていると意識する。現実生活（＝価値世界）での価値

18）マルクスは「価値形態論」で商品がその具体的属性を抽象して無差別一様抽象性に転換されることを解明している。この説明では同時に商品所有者もそのパーソナリティは抽象され，同質な価値実践者として登場している。したがって商品所有者の自由・平等は等価交換を遂行することになる価値実践者の属性の表現である。（拙稿，「資本主義社会の再生産と人権観念」（上），参照）
『Economic Theory』〔Ⅰ〕P.72 by David P. Levine, レヴィンも同じ視点から「価値形態論」を解釈している。

実践は，父親，あるいは夫という役割を無視しなければならないのであるが，つまり彼は労働力商品として機能しているだけであるが，彼の主観においては「生活世界」は現実生活になる。(具体的には「生活世界」を家庭，家族関係の下での世界と仮定している。)

この二つの世界は，彼，彼女の内に存在している。資本主義社会においては「生活世界」は価値世界に対して従属的である。しかし従属的であることの知覚は「生活世界」の用を果たせなくしてしまう。彼，彼女は精神分裂に陥ってしまう。

彼，彼女は，精神的分裂を回避して，この二つの世界を共存させようとする。いうならば精神面におけるホメオスタシスが働くということであるが，

この点がうまく処理されると「生活世界」と価値実践の対立は，表面化することなく，つまり意識化されることなく，彼，彼女は平常な生活を続けることができる。したがって社会的危機の顕在化は回避されるであろう。

社会的危機というのは価値実践のサボタージュであり，拒否である。これはこの対立からの帰結なのである。

価値実践は資本主義社会にとって必須であるのだから，当然それに照応した価値世界は消失することはない。価値世界は資本主義社会が作り出しているのであって彼，彼女にとって所与である。「生活世界」は人間にとって必須のものである。したがって人間であるかぎり，これは消失することはない。人間はいかなる状況に置かれても「生活世界」をもっている。「生活世界」をもっているから，劣悪なる状況にも耐えることができるのであるし，それを克服しようともするのである。

価値実践の拡大・継続は二つの世界の対抗によって精神的緊張を高めるのであるが，資本主義社会は「生活世界」を逆にこの緊張の高まりを顕在化させないように利用する。「生活世界」は彼，彼女が主観的に構成しているのであるが，したがって彼，彼女は自己の形成過程を異にしているように「生活世界」もそれぞれ相違しているであろうが，資本主義社会の存在様式がこれを一元化させてくる。そしてこれが現実の生活から「生活世界」の遊離の

可能性を促進していく。

現実の生活において価値世界が形成されている場と生活世界が形成されている場は時間的，空間的に分離している。これが，彼，彼女の内部において対立している二つの世界を分離してしまうのである。あるいは二つの「場」（世界）を，目的—手段，の関係にすることで対立の解消を装う。ホメオスタシスの作用である。

これは生活世界を豊かにするための手段として価値世界の場を位置づけるように彼，彼女に仕向ける。価値世界が課してくる量的競争への参加強迫も，イメージしている「望ましい世界」を確立するためとして納得してしまう。「生活世界」と価値世界の場は目的と手段の関係として意識されるのである。価値実践の強化されるにしたがって手段としての価値世界の場が彼，彼女を支配する度合いは強くなっていくのであるが，すなわち手段の自己目的化ということであるが，それだからこそ彼，彼女にとって，したがって資本主義社会にとって「生活世界」の重要性が増していく。望ましき世界としての「生活世界」は，無味乾燥な価値世界の場が日常的に重視されればされるほどつまり価値世界が彼，彼女の生活を規制すればするほど彼，彼女の心の奥底では強くなっていく。

以下では「生活世界」と価値世界を具体的な場に移して論じることにしよう。

2　家庭と職場

価値実践の世界とは具体的には企業，職場における有意性体系，与えられた役割の下で志向し，経験し，感じたことの総体である。「生活世界」とは家庭における有意性体系，与えられた役割の下で志向し，イメージするところの彼，彼女にとっての望ましき世界である。この世界は彼，彼女が日常的に経験していることに規定されている。

家庭は家族関係が形成・維持されている場のことであり，ここでは価値関係に律せられることが最も弱い。父親，母親，子ども達の結んでいる関係は

具体的，個性的である。家庭から遠ざかるにしたがって価値関係が強くなっていく。企業，職場は価値関係によって律せられることが最も強い。この関係は本質的には匿名的，無個性的である。企業，職場と家庭は対極に位置している。企業，職場を核とした同心円の拡大が家庭を核とした同心円を侵食していっているのが，資本主義社会の図である。

「生活世界」を家庭，家族関係と結びつけるのは「生活世界」に具体的に接近するためである。いうまでもなくこの結合は彼，彼女の深まっていく孤独感を癒す最後の拠り所が家庭，家族であるということを仮定している。彼，彼女にとって会社の存在は自己の家庭の上位にあるとは考えられない。国家の存在でさえ彼，彼女の存在，したがって家庭の存在の下位にあることを市民社会は規範としている。

「生活世界」「価値世界」カテゴリーを使用するのは「主体」を取り上げているからである。彼は職場の規律に従い，職場で与えられた役割の要求することを果たしている。他方，家庭では父親，あるいは夫としたの役割を果たしている。

こうした彼，彼女が社会を維持し，再生しているのである。

近代に入って職場と家庭が分離してきたということは，一般的に認められている。職場はモノを生産するところであり，家庭はそのモノを消費して労働力商品を職場に供給する。

このように生産の場と消費の場の分離が近代社会の特徴である。この分離によってもたらされた家庭は，資本主義社会でいかなる位置にあるのであろうか。

職場における人と人との関係は，簡単に量によって表示される。これは，人々の個性を量に還元してしまうので彼らを代替可能とする。これを価値関係と呼んでいる。

家庭における人と人との関係は，父親，母親，夫，妻，……としてのそれであって具体的，個性的であって，代替することはできない。二つの関係は対立的である。価値関係は耐えず家庭において結ばれている関係を侵食し，

同化している。「お金」で万事が解決されるという社会の風潮は，家庭を巻き込み，家庭の関係，規律を社会の常識に変質させていく。これは父親，母親，あるいは夫，妻の生活時間の益々大きくなる部分を直接的，間接的価値実践が占めていっているということである。父親，母親，あるいは夫，妻の役割が従来考えられていたものから価値実践に適応するように変わっていっているということである。家庭は貨幣（価値）関係に律せられている資本主義という大海の中の孤島のようなものである。それはたえず荒波によって侵食されている。家庭で従来は為されていた種々の事柄が，今では「お金」に換算されるようになってきた。

「家庭の愛」が「お金」によっていとも簡単に破壊される，あるいは維持されるという事例が増えてきている。

しかし，考察しなければならないことは資本主義は侵食している孤島を必要としているという点である。孤島は資本主義社会には不可欠の存在であるということである。

「生活世界」は家庭における人々の，つまり父親，母親，夫，妻，……が具体的に経験しているところの，そして希望的志向をしているところの世界であった。「生活世界」は資本主義の荒波を乗り切っている船が安らぎを得るところのようなものである。

資本がその経済的合理性を徹底的に追求するとしたら労働力の再生産をも他の生産要素と同じように直接管理に至るであろう。すなわち上述の意味での家庭（＝孤島）は完全に消滅してしまうであろう。奴隷制度は「直接管理」をギリギリ押し進めた形態であるだろう。しかし，資本による労働力の維持・再生の直接管理は，必然的に労働力商品化の否定となり，このことは彼，彼女には社会的規範である個人の自由・平等の否定と実感される。

だから自由，平等をタテマエとしている社会では社会統合の面からすると労働力の維持・再生の直接管理は非効率的となる。つまりタテマエを否定すると社会秩序維持のために，より多くのコストを要することになるので資本は現実的に家庭＝孤島を温存させるのである。資本主義社会における家庭は

「生活世界」の母胎という意味で社会を安定化させる性格を有しており，これが総資本の願望である社会秩序の維持を助けるのである。個々の資本は家庭＝「生活世界」を破壊していくのであるが，総資本はこれを維持しなければならない。これは現実の生活から「生活世界」を遊離化させることで果たされることになる。

家庭は彼，彼女が第一次的社会化を達成するところである。第一次的社会化は第二次的社会化を性格づける。ここでの「第一次的社会化，第二次的社会化」はバーガー，ルックマンからの引用の通りである。すなわち「第一次的社会化とは個人が幼年期に経験する最初の社会化のことであり，それを経験することによって，彼は社会の一成員となる。これに対し，第二次的社会化とは，すでに社会化されている個人を彼が属する社会という客観的世界の新しい諸部門へと導入していく，それ以後のすべての社会化のことをいう。」[19]

彼，彼女の社会的制度についての学習は第二次的社会化の過程ということになるが，制度の正当性，根拠づけ，については第一次的社会化の影響が貫徹するであろう。制度の仕組，制度の運営についてではなく，制度の存在そのものが問題になるときは，当然にもそれの彼，彼女にとっての意味が問われてくるのである。したがって彼，彼女の性格を形成する第一次的社会化が重要となる。ここで子ども達が内在化したものは他者との交流によってではなく，親への同一化によって獲得したものである。これが彼，彼女の性格を形成しており，後の成長過程にも影響を及ぼしていく。

家庭でまず共同体に固有の感覚が親との交渉過程で子ども達に形成されていく。すなわち，美についての，恥についての，悲しみ，喜びについての，……感覚が形成される。さらに，社会の基本的約束ごと，（例えば嘘をつ

19)『日常世界の構成』P・L・バーガー，T・ルックマン，訳・山口，221頁
(『The Social Construction of Reality』by Peter L・Berger and Thomas Luckmann)

いてはいけない，盗みをしてはいけない，というような）行儀作法，風俗，習慣，……を学んでいく。

これらは共同体がその大枠を与えているのであるが，それぞれの家庭，家族関係によって色づけされる。いうまでもなく「生活世界」は，このように家庭，家族関係の下で獲得された感覚，知識を基底にして構成されているのである。ここに社会秩序にとっての家庭，家族関係に関連しての「生活世界」を重視しなければならない理由がある。[20]

資本主義社会が家庭を包摂（価値関係による家族関係の侵食，同化）する仕方に個々の資本主義社会の性格が示される。これは家庭の形成史と資本主義社会の発達史の相違による。すなわち家庭は非資本主義的要素を多く抱えている。これを資本主義は同化していくのであるが，個々（日本，アメリカ，イギリス，……）の資本主義社会の特徴はこの同化において生じる。

家庭と職場の連関をまず従来の図式でその大枠をおさえておくことにしよう。

家庭は労働力を再生産する場であり，職場は価値実践の場であるとするなら，循環(Ⅰ)(Ⅱ)の図が示すように家庭（生活領域）は循環の不可欠の環節を成している。

循環は価値実践によって遂行されているのであるから，循環は職場によって構成されているということができる。

家庭は労働力の供給と消費財の購入に関連して価値実践の世界と接する。労働力商品の形成，供給と消費財の購入が家庭における大事であるなら，そ

20）『現象学的社会学』（森川・浜，訳）『ON PHENOMENOLOGY AND SOCIAL RELATIONS』 by Alfred Schutz,「蓄積された知識」について，A・シュッツは次のように言う。われわれは日常においては……常に蓄積された手もちの知識というものをもっており，それを枠組として過去や現在の経験を解釈し，また未来の出来事についての予測を行っている。こうした蓄積された知識は，それに固有な歴史をもっている。この知識は経験というわれわれのこれまでの意識活動の内で，またそうした活動によって構成されたものであり，今ではわれわれのごく当り前の所有物となっているものである。」（訳，31頁）

われわれにとっては社会，家族が所与であるようにこの知識は所与である。

れだけ一層，家庭は価値実践の世界の影響を被ることになる。家庭における関係，つまり家族関係は価値世界に対して受動的である。家庭に積み上げられたモノ（消費財），労働力商品を高価格にするためのブランドを獲得する競争の帰結である受験戦争の激化，受験勉強の低年齢化，これらは直接的価値実践の拡大・強化に照応した間接的価値実践の拡大・強化である。問題は資本主義社会の荒海からの避難場所としての家庭は一体どうなるのかということである。その前に，この問題は私達は資本主義の荒海（価値関係）からの避難場所を必要とするのかという問題を提起する。

この点についてタルコット・パースンズは家庭を避難所と位置づけている。またエドワード・ショーターも「冷酷で無愛想な外界から人びとを守る家庭愛に満ちた温かい避難所」，「情緒の砦」として家庭を位置づけている。[21]

避難所が彼，彼女を父親，母親，あるいは夫，妻として温かく迎えてくれるかぎり，彼，彼女は冷酷な荒海に耐えることができるのである。

したがって家庭，家族関係の維持は価値関係によって律せられている社会（荒海）の秩序維持が頼るべき最後の砦になっているのである。父親，母親，子ども達，あるいは夫，妻は彼，彼女にとって「生きがい」を実感させてくれる人達である。

家庭において間接的価値実践が強化されていくことは彼らが貨幣（価値）に還元される無差別一様な抽象的存在になってしまうことである。

これは避難所としての家庭を内部から崩壊させることである。

価値増殖の追求，つまり価値実践の拡大・強化は資本が意図していることであるが，このことが家庭・家族関係を侵食し，破壊していくことは資本の意図せざるところである。

資本は，父親，母親，子ども達がそれぞれの役割を果たす健全な家庭を望んでいる。

---

21)『近代家族の形成』，E・ショーター『The Making of the Modern Family』by Edward Shorter

販売広告が示している「愛のある，健全な家庭」を資本が望んでいるのは本当であろう。

資本は貨幣を第一義とするような家庭は望んではいない。販売広告は「生活世界」をイメージ化したものということができる。しかし資本がアピールする「愛のある，健全な家庭」が実際には間接的価値実践を強化しているのである。

ここに資本が直面する深刻な問題が存在する。「深刻な」というのは資本の行動が資本が所与としなければならない社会秩序の安定に貢献することが大である「健全な家庭」を破壊することになるからである。

秩序の維持ということで資本は国家と協調して家庭・家族関係の維持に努めるのである。

秩序の維持にとって重要なことは，「健全な家庭」から引き出されるそれぞれの役割の保存，したがって規範の保存である。したがって彼，彼女の内に「健全な家庭」の概念が実際の家庭がどうであれ，保存されることが，秩序維持に必要な要件である。

価値関係の拡大は社会解釈の枠組みとしての功利主義，個人主義の一般化をもたらすのである。国家は経済システムの円滑化を援助するために功利主義，個人主義に立脚するのであるが，他方では社会統合を推進するため伝統的価値を絶えず強調して伝統的価値の保存場所として「健全な家庭（＝「生活世界」）」という観念を利用する。「生活世界」を構成している感覚，知識と伝統的価値の結合を意図するのである。伝統的価値は過去からの連続性を補強して社会の秩序維持に貢献する。

明らかに功利主義，個人主義と伝統的価値は対立するのであるが，国家はこの対立をあいまいにし，協調に努める。（資本主義社会における国家については別稿で論じるつもりである。）

3　「解釈」と「生活世界」

「解釈」は（二の２）で述べているように解釈の対象である表現体系と解

釈者の「生活世界」が有する志向性によって規定されている。[22]「解釈」と表現体系との間に生じるズレは主として「生活世界」が有する志向性による。志向性が表現体系の読み取り（解釈）を一面的にするのである。一般的には「解釈」は表現体系を効率の基準でもって論理的に構成しているということができる。しかし彼，彼女の，私の「解釈」に生じているそれぞれの相違は，それぞれの志向性の相違によるのである。

「生活世界」では（解釈者である）私と私と交流している（私にとって有意なる他者である）彼，彼女は役割を与えられている。（もちろん私が構成している「生活世界」であるのだから，役割も私が与えているのである。）表現体系を構成しているモノは「生活世界」では価値ではなく，私達に役立つモノであるか，否かという基準で配列されている。したがってモノは私達にとって有用と認知されたその属性によって意味を与えられている。

価値実践によって作動している経済システムにおけるモノも「生活世界」からは，モノの属性によって意味を与えられている。例えば，「資本は労働手段である」「貨幣は物々交換の不便を解消するために作りだされた」というように解釈される。資本や貨幣が人間にとっての有用性から，したがってそのモノの属性から把握されている。

彼の「生活世界」と彼女の「生活世界」は「生活世界」を形成する主たる場である家庭，家族関係の中味の相違に照応して相違している。しかし上述の「解釈」の特徴は彼，彼女のそれに共通している。これは彼，彼女が資本主義社会の構成員であるということと「生活世界」が共有している性格によっている。「解釈」の方向性を規定している「生活世界」の志向性は家庭・家族関係の相違によって相違している。しかし諸解釈はそれぞれに一定の方向性によって貫かれている。

家庭の維持は資本主義社会を支えることにつながっている価値実践によってなされる。したがって「生活世界」が付与する意味は，すなわち述語は，

22) アルフレッド・シュッツ，前掲書，「4章　志向と解釈の社会的手段」

それぞれに違っていても付与される対象は，すなわち主語は，価値カテゴリーとしての表現体系である。

直接的，間接的価値実践が彼，彼女の生活時間の益々大きくなる部分を占めてきている。

現実生活を肯定するか，否定するか，によって「生活世界」は基本的相違を示す。

「解釈」の対象が価値カテゴリーの表現体系であるという（主語が価値カテゴリーであるという）共通性は，この現実生活を肯定する彼，彼女の「生活世界」の志向性から引き出されるものである。

（自己の実践の正当化を意図した）解釈が社会的に容認されるとき，彼，彼女は社会的にアイデンティティを獲得するのであるが，社会的アイデンティティの獲得は「生きがい」を実感するための必要条件なのであってこれがストレートに「生きがい」「存在意義」の実感に結びつくというのではない。解釈は「生活世界」における有意の他者によっても容認されなければならない。「生活世界」における有意の他者とは具体的には父，母，子ども達，親友であり，あるいは夫，妻である。言いかえると現実の生活と「生活世界」が重なることが，「生きがい」「存在意義」を実感するための必要にして十分な条件である。

かくして「生活世界」は「解釈された表現体系」，つまり制度を根拠づけることになる。換言すると「あるべき制度」が規定される。

「根拠づけ」は制度それ自体から導出されるのではない。「根拠づけ」は制度の存在を「生活世界」における有意の他者（人間）に関連させて問うことであって制度の機能，運営からは引き出されない。根拠づけは「生活世界」の志向性によって規定されている。制度の機能，運営は「生活世界」に及ぼす影響を通して志向性を規定している。

「志向性」は第一次的社会化によってほぼその骨組みを作りあげている。

すなわち「志向性」，つまり「解釈」の内容に影響を及ぼす知識は第一次的社会化によって獲得されたものであり，対象の類型化，有意性の体系を形

成していく基礎的なものである。それは「身体によって覚えこまれている技術や生活をかたちづくる一定の情緒的認識のパターン，すなわちエートスや価値意識，また社会規範等々」である。

制度はこのような知識によって肉付けされた「解釈」によって根拠づけられるのである。

制度の機能，運営についての知識は第二次的社会化の過程によって獲得される。「解釈」が備えなければならない論理性は，この過程で得られるのである。すなわち「第二次的社会化」は「すでに社会化されている個人を彼が属する社会という客観的世界の新しい諸部門へと導入していく」ということであった。

「解釈」が有する「志向性」と「論理性」は以上のように図式的にいうと第一次的社会化と第二次的社会化の過程で獲得されていくのである。

4　生活世界，間主観的生活世界，象徴的世界

彼，彼女が経験し，理解する事柄はこれら三つの世界の相互連関を通してそれぞれの世界に沈澱，蓄積されて知識として更に経験を豊かにしていく。「事柄」はそれぞれの世界に種々な面から色づけされて，あるいは「事柄」の或る面が強調されて沈澱，蓄積されている。「生活世界」は個別的である。つまり彼の生活世界，彼女の生活世界というように。間主観的生活世界は，彼の生活世界，彼女の生活世界，……に共通している部分からなっている。

彼は他者を自分とだいだい同じような人間であると判断する，あるいはXの状況下ではYの行為をするであろう，というように推測をする，彼女もまた彼と同じように判断し，推測する。彼らの日常の経験の大半はこのようなかたちで相互に了解しあっている。間主観性がかかる了解を成立させている。間主観性と同じように「間主観的生活世界」を想定することができる。彼，彼女に現実の生活で「生きがい」あるいは「存在意義」を求めさせる状況は基本的に共通している。すなわち，かかる状況は価値実践の深化，拡大によって頻繁に引き起こされてくるようになる。

これは彼，彼女の「生活世界」の均質化をもたらしてくる。この均質化は「間主観的生活世界」の成立を容易にする。つまり「間主観的生活世界」には彼，彼女の望んでいる世界，あるべき秩序，が濃縮されているのである。

資本は「間主観的生活世界」を販売戦略の決定の重要な要素としている。資本は彼，彼女に「間主観的生活世界」を具体的に提示するのである。資本はショーウインドウの世界を「生活世界」にしてしまおうとする。彼，彼女の「生きがい」を実現するモノ（商品）を資本は提供しようとする。

かくて「生活世界」と「間主観的生活世界」とは資本の活動範囲の拡大によって相互促進的に確定していくのである。

象徴的世界は個々人の多様な実践の経験を整序することができる枠組を提供する。それはあらゆる事柄を秩序づけようとする。すなわち象徴的世界によって社会の過去，現在，未来も統一的に解釈される。もちろん，象徴的世界による社会解釈はこれが個人の過去，現在，未来の解釈に入ってくる限りにおいて可能なのである。

かかる意味からすると象徴的世界の典型は「神話」あるいは「宗教」のようなものということができる。象徴的世界は人間の「誕生」と「死」を意義づけることによって完成する。実際，人間の関わるあらゆる事柄は，これによって秩序づけられる。

象徴的世界を生み出すのは，人間の本源的性向であろう。それは暗闇の中に置かれた時の恐怖に対する防衛，すなわち明かりを求める行為のようなものである。

それは世界における自らの位置，存在の確定を望む性向である。人間に独自に備わっているものという意味においては象徴的世界も「生活世界」も同じである。しかし前者を生み出す行為は後者のそれよりもはるかに意識的でなければならない。

象徴的世界を生み出す恐怖心は肉体的レヴェルのそれではなく，意味のレヴェルにおいて生じる恐怖心ということができよう。人間は社会の秩序だった構成物から隔離されると，あるいは自己の有意性の体系を否定されると，

精神的安定を欠いてくる。つまり象徴的世界の動揺である。逆に言うと彼は所与の有意性体系，シンボル体系をあたかも肉体の一部のように一体化しており，この上に象徴的世界は創りだされているのである。したがって，象徴的世界の創出には新たな有意性体系，シンボル体系の確立が前提になっている。

さて，資本主義社会では「宗教」とか「神話」は社会の解釈枠組みとしては主役の地位を退いているが，「生活世界」では依然としてマージナルな状況（例えば「死」の意義づけ）を秩序づけるために根をはっている。

近代科学の発展は未知なるものに対する人々の恐怖心を和らげてきている。それは未知なるものはいつかは解明されるという科学への信頼による。したがって日常的経験の大半については未知なるものの存在をいずれ解明されるものと認知することで，それらの秩序づけを心理的に可能とさせている。

資本主義社会の解釈枠組みは，社会それ自体は人間によって作り出されるものである，という基本認識の下に構築されている。このことはホッブス，ロック，ルソー…等々の自然法を論ずる人々すべてに共通している。この基本認識は近代科学の発展と「社会」に関する人々の諸議論の深まりを基礎としている。これが社会の解釈枠組みとして「宗教」あるいは「神話」の成立基盤を縮少していったのである。

伝統的社会（人格的依存の社会）では象徴的世界（神話，宗教）が彼，彼女の経験に秩序を付与するということは社会的現象に対しても統一的意味を付与するということであった。これは社会を律する関係と彼，彼女を結んでいる具体的，個性的関係とが同じであるということによる。この場合，社会も諸個人も極めて強固にして安定的である。社会と諸個人は一体的である。

資本主義社会（物的依存の社会）は匿名的，抽象的関係，つまり価値関係によって律せられているのである。ここで問題にする「象徴的世界」は価値関係の下での彼，彼女の経験に秩序を付与している。資本主義社会それ自体は「象徴的世界」を必要とはしていないのであるが，彼，彼女は必要とする。それは，彼，彼女が死を逃れることはできないからである。彼，彼女は死を

位置づけることによって確固とした精神的安定を得ることができる。したがって今や「象徴的世界」の基礎は，彼，彼女の内にあるということが明確化された。近代における個の確立，つまり個人と社会は別々の存在であるという主張は「象徴的世界」が社会の解釈枠組としての位置を失ったことと個々の人間は依然として「象徴的世界」を必要としていることに応じている。いわば，これが「私」と「公」の分離として観念されていることの内奥である。

「象徴的世界」は「私」的領域において作用している。

「公」(＝社会) における解釈枠組は資本主義社会それ自体が作り出している。

資本主義社会は秩序維持のために「象徴的世界」を利用することはできてもそれを消失させることはできない。彼，彼女は資本主義社会の解釈枠組みを自己の生き方に指針を与えるところの「象徴的世界」に取り込んで「生活世界」を規制する。

彼，彼女にとって「象徴的世界」と資本主義社会の解釈枠組が対立するのであれば，排除されるのは解釈枠組であろう。

「生活世界」,「間主観的生活世界」,「象徴的世界」はそれぞれに関連しており，その中味は固定しているというのではなく，その関連によって変動する。

さて関連についてである。「生活世界」に具体的に対応するのは家庭であった。「象徴的世界」は例えば，資本家，父親，というような役割を越えて人間を問題にする。つまり「死」ということに対応するのは資本家，父親……という役割ではなく人間である。

この意味からすると「生活世界」は「象徴的世界」によって影響され，規制されている。

「生活世界」は解釈に志向性を与える。「象徴的世界」は解釈に普遍性を与えようとする。「象徴的世界」によって規制された「解釈」は正当化を要求するというよりも自己の生活態度の表明という性格を強くしている。

「生活世界」はイメージとして即自的にも得ることができるが，「象徴的世界」は反省的に実践することによってのみ得ることができる。「生活世界」をイメージするのに特別の訓練は必要ではない。「象徴的世界」の獲得はそうではない。

多くの人々の場合，つまり実際には「生活世界」が「象徴的世界」をも代替しているのである。

資本主義社会の再生産は「象徴的世界」を必要とはしない。強い宗教倫理に裏打ちされたような人々を資本主義経済は必要としないのである。(宗教心に篤い価値実践者は偽善者であるというマルクスの批判，「精神のない専門人」によって担われる資本主義の将来に対するヴェーバーの危機感を想起せよ。) 資本主義経済が必要とする人々は労働力商品の提供者であり，商品の消費者である。彼らが社会の革新者となり得るためには所与の有意性体系，シンボル体系を覆させなければならない。

補　論

生活領域への価値実践の浸透によって彼，彼女の内に葛藤が生じる。この葛藤は彼，彼女の内において拮抗している実践の二重性による。この葛藤に関連してマートンの「アンビバランス」について述べておくことにしよう。その前に，「浸透」に関連したかたちでの「葛藤」の生じる事例が，どのようなものかマートンの例からイメージを与えておくのがよいであろう。

(マートン，「アンビバランスの社会学理論」金沢，訳，所収，現代社会学体系・13，R. K. Merton，「Sociological Ambivalence」)

「家族は，われわれの基礎的制度であり，国民生活の神聖な中核である。だが，仕事がわれわれの尤も重要な制度であって，国民の福祉は，仕事のいかんにかかっているのだから，他の諸制度は，仕事の要求に従わなければならない。」

「正直は，最良の政策である。だが，商売は商売であって，商売人が手の内をかくさなければ，馬鹿だ。」仕事で成功することと正直であることは往々にして対立する。この対立は彼，彼女に葛藤をもたらす。私は次のような例を示しておこう。彼，彼女は父親，母親として子どもの苦悩を感知していながら，子どもの創造性を伸ばしてやりたいと思いながら一面的な受験勉強を労働力商品としてのブランドを獲得させる為に強制していく。つまり親も子ども間接的価値実践に邁進するのである。ここで述べられていてることは，制度や役割が前提にしている価値観の対立が個人の内に「葛藤」を生じさせるということである。すなわち「それら（例示の価値）の諸前提が特定の役割のなかに組みこまれると，そこに社会学的アンビバランスの核心的タイプが生じる。つまり，特定の地位の特定の役割のなかに相矛盾する規範的要求が仕組まれるわけである。」という。だから，この葛藤を心理学的に考察するのではなく，これを（第四のタイプの）社会学的アンビバランスと呼び，社会構造的に考察するというのが，マートンである。マートンはここでは家族制度が前提にしている「価値観」と仕事，つまり経済システムが前提にしている「価値観」の対立から生じる葛藤について語っているのである。彼は，第一のタイプのアンビバランスから第六のそれまでを挙げている。これらの詳細についてはここでは触れないで彼の方法について若干の検討を加えてみよう。私の方法も社会構造的に「葛藤」を考察するというものである。

しかし彼との決定的相違は「葛藤」の根源を彼は，「役割」カテゴリーに，私は「実践の二重性」カテゴリーに求めていることである。彼は述べている。「核心的意味における社会学的アンビバランスは，ある役割の社会的規定にみられる相対立した規範的傾向をさしているので，アンビバランスの分析を可能にするためには，こうした役割をどのように特徴づけるべきかを考察する必要がある。」（同上，383頁）

そして「役割」を次のように位置づける。「社会学的アンビバランスの見地からいえば，社会的役割は，一組の支配的属性ではなく，規範と反対規範との動的組織とみるべきものである。ここで提案したいのは，主要規範と副

次的な反対規範とが代わるがわる役割行動を支配して，アンビバランスを引き起こすということである。」(同上，388頁)「役割の社会規定のなかに，潜在的に矛盾する諸規範が仕組まれており，社会関係の状態が変化するにつれて，規範的に容認しうる行動の交代が，そこに認められているのである。このことが，社会学的アンビバランスを助長する種々の役割要求間の振幅がみられる主な根拠である。」(同上，390頁) 彼の展開の問題点は役割の遂行からアンビバランスを引き出すために「役割」を「規範と反対規範の動的組織」としているところである。私は役割遂行の実践は，既述しているように社会を支えることになる実践と人の本源的実践を包含していると考えている。マートンのいうような「役割」遂行から生じる葛藤は，社会が要求している実践が本源的実践を包摂することができないことに依っている。このように「役割」を把握することで社会構造的分析に至ることができるであろう。つまり「役割」は実践の下位概念である。彼が仕事の場，あるいは生活の場でそれぞれ果たしている役割は彼の内部にあって対立することもあれば協調的であることもあろう。彼の内部における役割間の対立，協調は役割を与えているそれぞれの場を構造的に規定している実践の検討によって解明の基礎が得られるであろう。それぞれの場が社会再生産，つまり社会秩序の安定を構成しているのであればそこでの役割遂行の実践は価値実践である。基本的には，社会的アンビバランスは役割遂行の実践（価値実践）とそれに包摂されない実践（使用価値実践）の対抗から生じるのである。親として子どもに受験勉強を強制する彼，彼女に葛藤が生じるのは使用価値実践の存在のゆえである。すなわち，この実践の二面は主体の内に拮抗しているのである。

以上の点を踏まえて次にはそれぞれに価値実践ではあるが，彼が果たしているそれぞれの役割間の対立，また彼と彼女の（価値実践によって規定されている）役割遂行に生じる対立の考察に入るべきであろう。